令和8年度実践報告会（第二回研修会）

早稲田大学インクルーシブ教育学会では、教育現場におけるインクルーシブ教育の実践を共有し、参加者同士で学び合う場として「実践発表会」を毎年開催しています。本年度も多様な実践の中から２事例を発表していただきました。　講評：本田恵子会長

高校の通級が有効に機能するための要因の検討

～成功事例と失敗事例を通して～

宮城県立高校　村上真由美氏　鈴木詩子氏　高橋真美氏

宮城の県立高校で巡回による通級指導を担当している先生方から、県立高校での実践をご紹介いただきました。「学びの多様性を活かした教育プログラム事業」として８年前に通級指導が始まりはしたものの、教員から理解を得にくい状況があったそうです。そのような状況を改善するために、年度初めに県教委主催の担当者会の開催や UDL に基づくアセスメントや援助を行いました。生徒の成長が認められることで、教員の理解が進み、連携が取りやすくなってきたそうです。それぞれの生徒の興味や関心に合わせた生活に直結するような課題を用意することで、生徒が進んで学習に取り組む姿が育ってきたり、担任と個別の指導計画の作成を進めたりすることで、教員の指導も少しずつ変わってきているようです。通級担当者の人数に対して入級希望者が多く、ニーズが異なる生徒でのグループ編成をせざるを得なかったり、途中からの入級を受けられなかったりと新たな課題もあるそうです。通級指導で学んだことをそれぞれの学級で生かせるよう、今後も指導を工夫していきたいと述べられていました。

中学生アンガーマネージメントにおける箱庭実践

～大切なものを分かち合う経験～

教育心理相談室「ひまつも」 青木佑太郎氏

青木氏からは、早稲田大学教育総合クリニックのアンガーマネージメントプログラムで「箱庭」を活用した取り組みについて、報告をしていただきました。具体的には、「大切なもの」をテーマに、個々で制作した箱庭をもとに、２名・３名の小グループで「共同箱庭」を作る活動を行いました。共同制作を通して、自分がどのように感じ、行動するのかを振り返るとともに、相手の感じ方や考え方にも目を向け、互いの違いを理解することを目指しました。その際、支援者は、生徒たちが自分の感情や反応を振り返り、「どのようなときに、どのように感じるのか」を具体的に考えられるよう声を掛け、自己理解や他者理解を促すことを心掛けました。活動を進める中で相手と共有できるようになり、自分も相手も OK となるような新しい行動パターンを練習する過程に進める成果が見られた生徒もいたそうです。

今回の実践報告会では、県立高校における通級指導が有効に機能するための取り組みとグループでの箱庭制作を行うというどちらも新たな取り組みを、参加者に報告していただく場となりました。今後も会員のみなさんからの実践報告を、お待ちしております。

○参加者から（一部抜粋）

・高校通級、箱庭実践ともに大変勉強になりましました。以前から知りたかったことが実践を通して知ることができ、今後の活動に繋げていきたいと感じました。また、他の方との交流や質問の場もあり、より詳しく聞くことができたことも貴重な時間でした。

・勤務校において（2 校）、教員は高校に通級はないといった認識が現状です。今後、自らも行動しつつ、支援が広がることを期待したいと思います。

・高校通級の広報活動は、県によっては、県教委の担当者の研修会の発表や、各学会誌の掲載文で知っていたので、宮城県のように、年度前予算化や継続性が確立していないと、担当者が義務感と使命感で実践され、ご苦労されている実態がわかりました。

・箱庭は私にはできませんが、子どもたちの心を見とる力をつけて行きたいと思います。

◎早稲田大学インクルーシブ教育学会 2026 年度　第3回研修会◎

「協働学習を通してファシリテーションを考える」
～子どもの学びの姿から教師の関わりを学ぶ～

講師：遠田　将大　氏
　　早稲田大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）講師
日時：2026年11月15日（土）9時00分～13時00分
会場：早稲田大学中の国際コミュニティープラザ　115―116
　　※オンラインは、最初の講義部分のみの視聴となります。

詳細は、学会 HP をご覧ください。ご参加をお待ちしております。